恋をする躰（からだ）

ジャネット・ウィンターソン

野中　柊・訳

WRITTEN ON THE BODY

JEANETTE

恋をする躰

江苏工业学院图书馆
藏书章

恋(こい)をする躰(からだ)
1997年2月20日　第1刷発行

著者――ジャネット・ウィンターソン
訳者――野中(のなか)　柊(ひいらぎ)
©Hiiragi Nonaka 1997, Printed in Japan
発行者――野間佐和子
発行所――株式会社講談社
〒112-01 東京都文京区音羽2-12-21

出版部 03-5395-3504
販売部 03-5395-3622
製作部 03-5395-3615
印刷所――株式会社精興社
製本所――牧製本印刷株式会社
定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は
著作権法上での例外を除き，禁じられています。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛てにお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。
なお，この本についてのお問い合わせは
文芸図書第一出版部宛てにお願いいたします。

ISBN4-06-206392-1（文一）

恋をする躰（からだ）

装丁　馬場崎　仁

WRITTEN ON THE BODY
by
Jeanette Winterson
Copyright © 1992 by Great Moments Ltd.
Japanese translation published by arrangement with
Jeanette Winterson
c/o International Creative Management, Inc.
through
The English Agency (Japan) Ltd.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ペギー・レイノルズに愛をこめて

私に仕事場を提供し、温かくもてなしてくれたドン&ルース・レンデル、編集においてインスピレーションを示してくれたフィリッパ・ブルースター、そして、この本を作るために奔走してくれたジョナサン・ケイプ社の皆さんに感謝しています。

どうして、愛の重みは失ってみて、初めてわかるものなのだろう。

もう三箇月も雨が降っていない。木々は乾ききった大地の、奥へ、更に奥深くへと鋭い剃刀のような根をはってゆく。豊かな水脈を探し求めているのだ。

葡萄の実は、蔓についたまま萎びてしまった。スポンジのように他愛なく、ぶよぶよとした感触。ぷっくりとして実が締まり、ほどよく歯応えがあればいいものを。今年は、青い葡萄の実を指でつまみ転がして、掌を麝香（じゃこう）の匂いで濡らす楽しみもない。雀蜂でさえ、そのわずかな茶色い果汁の滴りを避けている。そう。今年は雀蜂さえも。いつもの年とは違うのだ。

私は、あの九月のことを考えている。森鳩と・赤立羽蝶の・黄色い・収穫期の・オレンジ色の・夜のこと。あなたは言った。「愛してる（アイ・ラヴ・ユー）」と。私たちが言い合えることの中でも最も陳腐で言い古されたこと。それなのに、どうして、その言葉が聞きたくて聞きたくてたまらなくなるのだろう。「愛してる」なんて言葉は、いつだって引用句に過ぎないじゃないか。あなたがその言葉を使った人類最初の女というわけでも、私が愛の言葉の先駆者というわけでもないのに「愛してる」と口にするとき、私たちはその言葉の組み合わせを初めて発見した野蛮人か何かのように、身も心も捧げ尽くしてしまう。そう。私は、確かに、その愛の言葉に身も心も捧げたのだ。けれど、今、私はひとりぼっちだ。私の躰（からだ）から切り取られた固く淋しい岩の上で。

『テンペスト』に登場する怪物キャリバンの科白。
「おまえは俺に言葉を教えてくれた。おかげで罵り方を覚えたよ。おまえなんか疫病でくたばっちまえ。おまえの言葉を俺に覚えさせた代償に」

恋は発露を求めるものだ。おとなしくなどしていない。沈黙を守るはずがないし、おりこうでも控えめでもなく、姿は見せても口出しするな、なんていう態度を期待しても無駄だ。恋はまず賞賛というかたちを借りて現れる。グラスを割って、中の液体をこぼしてしまうほどの高い音で。それは自然保護論者の恋ではなく、大きな獲物を狙うハンターで、あなたはその獲物そのものなのだ。このゲームに呪いあれ。ルールがしじゅう変わっているのだから、ゲームを続けることなどできやしない。自分をアリスに見立て、フラミンゴと一緒にクローケーをして遊ぶとしよう。不思議の国では誰もがズルをして、そして、恋というのは不思議の国そのものなんじゃないかな？　恋によって世界はめぐる。恋は盲目。オール・ユー・ニード・イズ・ラブ。失恋のせいで死んじゃった人など誰もいない。大丈夫、立ち直れるよ。結婚したら、また事情は違ってくるだろうしね。生まれてくる子供たちのことを考えてごらん。痛手は時が癒してくれる。白馬の王子様やお姫様を、まさか、まだ待っているの？　そうして生まれる、ミニチュアの王子様やお姫様たちを？

面倒を引き起こすのは、陳腐で月並みな決まり文句だ。精緻な感情は、精緻な表現を求め

る。もし私が感じていることが精緻でないとしたら、そのときこそ、それを恋と呼ぶべきなんじゃないかな？　私にできることと言ったら、それをピンクのとびきりキュートなオモチャが詰まったゴミ缶の下に押しこんで、自分に宛てて、「婚約おめでとう」と書いたカードを送りつけることくらいなのだから、ねえ、まったく恐ろしいったらないよ。でも、私は婚約などしていないし、ひどく当惑しているのだ。私は恋に目をつけられないように、必死でそっぽを向いている。私が求めているのは、薄まった解釈、ずさんな言葉、無意味なジェスチャーだ。へこんだアームチェアのような、陳腐で月並みな決まり文句。私の前にも、幾百万ものお尻がここに座を占めてきたのだから、大丈夫。バネはくたびれ、布地には匂いがついて、どこか懐かしい感じがする。何も恐れることはない。だって、ほら、私のおじいちゃんとおばあちゃんもやってきたことなのだもの。糊の利いた固い襟にクラブタイを締めていたおじいちゃんと白いモスリンのスカートの下で息づく生命にちょっとばかり身を固くしていたおばあちゃん。彼らもやってきたし、私の両親もやってきたし、だから、さあ、今度は私が同じことをする番だよね？　あなたを抱きしめるためにではなく、バランスを保つ、ただそれだけのために両腕を広げ、あのアームチェアに向かって夢遊病者のように歩く。私たちは、どんなにか幸せになることだろう。皆、何と幸せになることだろう。そして、彼らは皆、末永く幸福に暮らしましたとさ。

暑い八月の日曜日のことだった。小さな魚たちが挑むように腹を太陽に向けている川の浅瀬で、私は水しぶきを上げていた。川のどちらの岸でも、草の緑は、ペンキのしぶきをかけたみたいにサイケデリックで毒々しい色合いの、ライクラのバイクパンツと台湾製のハワイアンシャツに占められてしまっていた。家族が群れ集まりたがる、ありがちな風景。突き出たお腹に新聞をのせて読んでいるパパ。魔法瓶の上にかがみこんでいるママ。海辺に転がっている岩の棒のように、痩せっぽちでピンク色の子供たち。ママはあなたが水に入ってゆくのを見て、縞模様の折畳式キャンプ用椅子から重たそうに腰を上げた。「ちょっと、あんた恥ずかしくないの？　こっちは家族連れなんだよ」

あなたは笑って、手を振った。躰は透き通った緑色の水の中で明るく輝いている。水のかたちはあなたのかたちにより添い、あなたを包みこみ、あなたに忠実だ。背を下にして、川のおもてに乳首の線も露に浮かび上がり、髪にはビーズのような水の雫。あなたはクリームのように滑らかだ。あなたの髪――両側に垂れる赤い髪をのぞいては。

「あんたの姿をうちの夫に見てもらわなくちゃ。ジョージ、こっちへ来てごらんよ。ねえ、ジョージ、来てごらんったら」

「俺は今テレビを見てるとこなんだよ。そんなこともわかんないのかよ？」ジョージは振り向きもせずにそう言った。

あなたが立ち上がったとき、水が銀の流れとなって滴った。私は思わず川の中を歩いてゆ

き、あなたにキスした。あなたは私の灼けた背中に腕を回し、そして、言った。「わたしたち、ふたりきりね」

見上げると、土手には誰もいなかった。

まもなく私たちの秘密の祭壇になったその言葉を口にしないよう、あなたはずいぶん気を配っていた。でも、私の方は以前からもう何度もその言葉を使ってきた。まるで願かけの井戸にコインを投げて、願い事が叶うよう祈るみたいにして。私は幾度もその言葉を、あなた以外の人に向かって繰り返してきた。忘れな草として——私のことを忘れないで、と——思いをこめて、何もわかってやしない女の子たちに捧げてきてしまったのだ。その言葉は武器であり、交換品だった。私は自分のことを不実な人間だと思いたくはないけれど、愛してると言いながら、その実、愛してなどいないのだったら、不実でなくて何だろう。あなたを慈しもうか、熱愛しようか、あなたに道を譲ろうか、あなたのために自分を高めようか、あなたを見て、いつも見つめ続けて、本当のことを告げようか。そして、愛が今こうして述べたようなことでないのなら、いったい、何だっていうのだろう。

八月。私たちは言い争っていた。あなたは愛が毎日こんなふうであったらいいと思っているんだね？　日陰でさえ三十三度の暑さ。この激しさ、この熱、あなたの躰を切り刻む電気

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

のこぎりの太陽。それも、あなたがオーストラリア生まれのせいだろうか。
あなたは答えず、ただ冷たい指で私の火照った手を握った。そして、麻と絹に身を包み、ゆったりと大きな歩幅で歩いていった。私は自分が馬鹿みたいに感じられた。そのとき、私は片足に、リサイクル、と書かれたショートパンツを穿いていたのだ。そして、ある女の子のことをぼんやりと思い出した。公共の記念碑の前でショートパンツ姿でいるのは失礼だと考えていた、私のかつてのガールフレンド。デートするときは、ネルソン提督の記念碑の傍で待ち合わせをした彼女に会う前に、私はチャリングクロスに自転車を止めて、トイレで着替えたものだった。
「どうだっていいんじゃないかな？　どうせ彼には一つしか目がないんだから」と私は言った。
「私には二つあるよ」そう彼女は言って、私にキスをした。つじつまの合わないことをキスで封じてしまうのはよくないことだけれど、私自身いつもそうしてしまう。
あなたは答えなかった。人は、どうして、答を必要とするのだろう。もしかしたら、答がなければ、途端に質問が馬鹿げて聞こえてくるからではないだろうか。だとしたら、この際、答は何でもいいのかも知れない。試しにクラスの皆の前で、カナダの首都が何処か訊いてごらん。冷淡に敵意をこめてじろじろと見返されるから。そっぽを向いてしまう人すらいるだろう。もう一度言う。「カナダの首都は何処？」沈黙の中で、掛け値なしの犠牲者となって答

を待っている間、自分でもよくわからなくなってくる。カナダの首都は何処だったっけ？どうして、オタワであって、モントリオールじゃないのだろう？　モントリオールの方がずっといいところで、エスプレッソは美味しいし、あそこには友達だって住んでいるっていうのに……でも、まあ、とにかく、首都が何処かなんて、どうだっていいのではないか。どうせ来年には場所を変えちゃうかも知れないんだし……たぶん、今夜はグロリアがプールにいるだろうな……うんぬん。

より大きな質問、答がひとつだけにとどまらない質問、答がひとつもない質問は、沈黙の中、扱うのがより難しい。一度訊かれた質問は消え失せることはなく、心の平静は失われる。一度訊かれた質問は広がりを得て、複雑さを増し、そのことで頭が一杯になって階段でよろけたり、夜眠れなくなったりもする。ブラックホールがその周辺を吸いこんで、光ですら逃れられない。それなら、質問などしない方がいい？　不幸なソクラテスでいるよりは、満足しきった豚でいる方がいい？　でも、効率主義の家畜飼育は、哲学者より豚に対して厳しいから、私はチャンスにかけるとしよう。

私たちは貸部屋に歩いて戻り、片方のシングルベッドに横になった。ブライトンからバンコクまで世界中何処でも、貸部屋と言えば、ベッドカバーがカーペットに合わせてあったためしはないし、タオルはいつも薄過ぎると相場は決まっている。私はシーツが汚れないように、タオルを下に敷いた。あなたは出血していたのだ。

私たちがこの部屋を借りることにしたのは、あなたが言い出したことだったね。一夜を過ごしたり、夕食を食べたり、図書館の裏で一杯のお茶を共にするだけでなく、もっと一緒にいられるように、と。あなたはまだ結婚していて、私は決してモラリストではないけれど、結婚というあの祝福された状態については、少しはモラルを持つことを学んでしまっていた。私にとっては、結婚などというものは、煉瓦か何かで叩き壊してやりたいガラス窓のようなものだった。自己顕示、自己満足、おべんちゃらに満ち満ちていて、窮屈で堅苦しく、すべてをコントロールしようとするもの。結婚したカップルが四人で出かけるところを見ると、まるでパントマイムの馬のようだ。男たちが一緒に前を歩き、女たちは少し遅れてついてゆく。そして、女たちがハンドバッグを携えてトイレに行っている間、男たちはバーからジントニックを取ってくる。こうでなければならないということはないはずなのに、たいてい、こんなものなのだ。思えば、私もたくさんの結婚を通過してきた。とは言っても、教会の赤い絨緞の上を歩いたわけではなく、いつも壇上から見下ろして。そうして、毎回、同じストーリーを聞かされていることに気がつき始めた。それは、こんなふうだった。

室内。午後。

ベッドルーム。半分閉められたカーテン。捲り上げられた寝具。妙齢の裸の女がベッドに横になり、天井を見つめている。彼女は言いたいことがあるのだけれど、それを口にするの

は難しい。カセットレコーダーからはエラ・フィッツジェラルドの『レディ・シングズ・ザ・ブルース』が流れている。

裸の女　私、いつもこんなことしてるわけじゃないのよ。こういうのを不貞って言うのよね、きっと（笑）。初めてなの。またやるとも思えないし。……つまり、他の誰かとってことよ。ああ、あなたとなら、またこうしたいわ。何度でも何度でも繰り返し（寝返りをうって腹ばいになる）。夫のことは愛してるわ。そう。愛してるの。彼は他の男とは違うもの。もし彼が他の男と同じだったら、結婚なんかしやしなかった。彼は特別なの。私たちは似た者同士なの。私たちには会話があるわ。

愛人は裸の女のむきだしの唇に指を走らせる。彼女の上に覆いかぶさり、彼女を見つめて。愛人は何も言わない。

裸の女　もしあなたに出会わなかったら、私はきっと何かを捜し求めていたでしょうね。放送大学を受講して、学位を取っていたかも知れないわ。こんなこと考えたこともなかったのよ。彼にはほんの少しでも心配をかけたくなかったんだもの。だから、彼には内緒なの。私たち、用心しなくちゃね。残酷にも我が儘にもなりたくはないわ。

ねえ、わかるでしょ？

愛人は起き上がり、トイレへ立つ。裸の女は肘をついてからだを起こし、広々とした豪華なバスルームに向かって独り言を続ける。

裸の女　早くしてね、あなた。（間）私、あなたのことを頭の中から追い出そうとしたけど、躰から閉め出すことはどうしてもできないみたいなの。昼も夜もあなたの躰を思ってしまうんだもの。何か読もうとすると、読んでいるものがあなたになるの。何か食べようとすると、食べているものがあなたになるの。彼に触られても、あなたのことを考えてしまうのよ。私は幸福な結婚生活を送る、中年の女だわ。それなのに、私に見えるものと言ったら、あなたの顔だけ。あなた、いったい、私に何をしちゃったの？

バスルームのカット。愛人は泣いている。終。

あなたが、あなただけが並みはずれた恋をする者で、だからこそ、こんなことができたなどと思うのは、かいかぶりというものだ。あなたがいなければ、その結婚は不完全なままで、

いろいろな側面でうまくいかなかったかも知れないけれど、それでも乏しい糧に頼って繁殖したことだろうし、繁殖しないまでも少なくとも萎びることはなかっただろう。あなたが現れたことによって、結婚は、萎びて疲れきって、もう利用されることもない抜け殻になってしまった。そこに住み着いていた者はどちらも逃げ去ってしまった後だ。でも、人っていうのは、とかく殻を集めたがるものだよね？　お金を出して殻を買い、出窓に飾る。そして、他の人たちはそれを褒めそやす。私はとても有名な人たちの抜け殻を目にしてきたし、更にたくさんの殻の空洞に息を吹きこんだこともある。修理できないくらいにひどいひび割れを作ってしまったこともあるけれど、そんなときは、持ち主がいかれた部分をすました顔で陰に隠してしまった。

ね？　こんなプライベートな場所にいてさえ、私のシンタックスはペテンにかかってしまったんだよ。結び目を切ったり、錠をこじ開けたり、自分のものでもないのに持ち逃げしたりしたのは私じゃない。ドアは開いていたのだ。まあ、確かに、彼女がそれを自分で開けたわけじゃなかった。彼女の執事が開けてくれたのだ。彼の名は〈退屈（ボアダム）〉。彼女は「ねえ、ボアダム。私に何か遊び道具を持ってきてちょうだい」と言い、彼は「承知しました、奥さま」と答えて、指紋が残らないように白い手袋をはめ、私のハートをノックした。そして、私は、てっきり彼の名が〈愛（ラヴ）〉だと思ったというわけだ。

私が責任逃れをしようとしていると思う？　いや。私は、あの頃、自分がしたこと、して

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.